

「しま塾」

- 新上五島町における自由参加滞在型研修の概要と課題 -

富永美穂子・武藤 慶子・上田 成一・田丸 静香・正木 基文

The Field Study for Comprehensive Understanding of Island Ecosystem in Shin-Kamigoto

Mihoko TOMINAGA, Keiko MUTO, Seiichi UEDA, Shizuka TAMARU, and Motofumi MASAKI

要 約

平成18年度から長崎県立大学（旧県立長崎シーボルト大学）看護栄養学部栄養健康学科において試験的に実施してきた新上五島町における自由参加滞在型研修、「しま塾」の概要および学生の上五島に抱くイメージの変化など、現在までの取り組みについて総括した。大学院生を含む栄養健康学科学生を新上五島町に一定期間滞在させ、新上五島町役場職員、(社)長崎県栄養士会上五島支部などの支援の下、上五島の自然、生活環境、文化、健康福祉の現状などを知るための学習活動を行った。「しま塾」に対する学生の事前・事後アンケート調査の結果から、低学年時から管理栄養士として働く意欲を高め、「しま」の自然、文化に対しては、学生の興味・関心を満足させる研修プログラムであると考えられた。しかしながら、学生が希望するような地域住民との交流の機会があまり得られず、事前学習、準備不足により、「しま」の理解が十分とはいえない状況でこれまでのところ閉講している。継続参加学生を軸とし、学生自身に研修目的を設定させ、それを明らかにするための方法を事前に検討した上で学生自身の活動時間を徐々に増やし、地域住民と「しま」の健康についてともに考えていくことが今後の課題である。

キーワード：大学生、滞在型研修、しま、地域交流

1. はじめに

「しま塾」は、長崎県立大学における研究面での一層の活性化を目的として全学共同研究として実施されている法人プロジェクト研究：しまの健康を守ろう - 上五島活き活きプロジェクト（Webサイト：<http://sun.ac.jp/research/project/kamigoto-project/>）の一研究課題として平成20年度は開講された。本学栄養健康学科学生を新上五島町に一定期間滞在させ、上五島の自然、生活環境、文化、健康福祉の現状などを学習し、「しま」の課題・改善の方向性を探る自由参加滞在型研修である。学生に総合的な人間教育を行うことが、「しま」の理解に結びつくかどうか、またこの研修プログラムが、「しま」の将来を担う人材育成にどのよ

うな効果をもたらすかを検討していくことを目的としている。平成19年11月に本学と新上五島町との相互協定が結ばれ、相互発展のため、地域振興、教育、健康福祉、学術等の分野で協力していくこととなった。新上五島町役場との連携の下、「しま塾」は、体験実習も含め、新上五島町内の施設訪問を組み入れた研修内容で構成されている。これまでの取り組みについて、経過を報告する。

2. 「しま塾」の概要

「しま塾」の実施状況を表1に示す。「しま塾」は、新上五島町と相互協定が結ばれる前の平成18年度から試験的に実施されていた栄養健康学科学生を対象とした滞在型研修で、平成20年度で3年

表1 「しま塾」の実施状況

年度	参加人数	引率教員数	滞在日数	研修内容
18	7名 3年生 7名	3名	2泊3日	講話(町概要) 見学・講話(教会めぐり、病院、老人保健施設) 栄養士会員との交流会
19	11名 1年生 3名 2年生 3名 3年生 4名 4年生 1名	4名	3泊4日	講話(町概要、上五島の歴史・食文化) 見学・講話(教会めぐり、病院、老人保健施設、保健所、地域ミニディ、転倒予防教室など) 郷土料理実習(赤飯、五島うどんサラダ、鯨なます、アオサの天ぷら、アオサの吸い物、煮しめ、かんころ餅)
20	25名 1年生 5名 2年生 10名 3年生 7名 大学院生 3名	5名	3泊4日 4泊5日 4泊5日 2泊3日	講話(町概要) 見学・講話(教会めぐり、病院、老人保健施設) 郷土料理実習(かやくご飯、じゃがいも団子のスープ、五島うどん入りカレーコロッケ、ナゴヤとセリの味噌和え、生イースト饅頭、かまぼこ、五島うどんチャンポン、かんころ餅)

目を迎えた。3月上旬に実施し、平成18年度は2泊3日、参加学生7名(引率教員3名)、平成19年度は3泊4日、参加学生11名(引率教員等4名)であった。上五島活き活きプロジェクトの中に組み入れられた平成20年度は滞在期間が最長4泊5日となり、参加学生は大学院生も含め25名(引率教員5名)であった。この滞在型研修が、①「しま」の現状、健康、文化、自然を考え、問題提起、改善策を検討していく体験型総合学習の場、②管理栄養士資格取得意欲を高める場、③自己管理能力、仲間との協調性、コミュニケーション能力を高める場として機能していくことをねらいとしている。

研修には、新上五島町役場職員による新上五島町の人口、健康状態の現状、保健事業、食育事業に関する概要の説明、上五島の地形を知るための教会めぐりを中心とする見学、(社)長崎県栄養士会上五島支部の協力による管理栄養士の職の現場を知るための病院、老人保健施設などの視察をいずれの年度においても組み入れている。病院、老人保健施設の視察には、本学科卒業生を含む現場管理栄養士による業務説明や給食施設の見学、介護食の試食などが含まれている。1、2年生は介護食自体を見ることも試食することも初めての学生がほとんどであり、見た目の色合いや味付けが大事にされていることを実感したようである。平成19年度は上五島の歴史と食文化に関する講話や保健事業の一環である地域ミニディ、転倒予防教室などの見学を組み入れた。また、平成19、20年度は新上五島町食生活改善推進委員の協力や新上五島町観光物産協会提供プログラムにより、五島う

どんを使用した料理や煮しめ、かんころ餅、かまぼこなどの上五島の郷土料理の調理実習を組み入れた(図1-1~図1-11)。

食生活改善推進委員の方々には地域の特産品を活かしながら、塩分や糖分の摂取に配慮したメニューの考案、ヘルシーメニュー集の作成など、新上五島町住民の食生活改善に積極的に取り組まれている。調理実習においては、アオサの天ぷらやナゴヤ(海藻の一種)とセリの味噌和えなど旬の素材を用いた料理とともに、郷土の特産品である五島うどんを使用した創作料理であるうどんサラダやカレーコロッケなど、創意工夫がこらされた料理を体験できた。平成20年度にかまぼこ、五島うどんチャンポン、かんころ餅および教会めぐりの体験プログラムを利用させていただいた新上五島町観光物産協会(webサイト: <http://www.shinkamigoto.org/>)においては、この他、様々な体験プログラムが準備されている。これら体験を通して、郷土の特産物や郷土遺産に対する地域住民の熱意と愛情を感じることができたと思われる。このような協会提供プログラムに参加することは、地域交流の場あるいは地域活性化提案の場となる可能性がある。

平成20年度は新上五島町との相互協定が結ばれたことから、3年生を中心に新上五島町健康作り計画に参画した。年代別の健康状況のデータを元に18~39歳、40~64歳、65歳以上の3区分で、地域住民の健康上の問題点の説明を受けた。それら年代別の健康上の問題点と改善の方法を提示した生活習慣病予防対策パンフレット作成に取り組み、研修期間中に新上五島町役場職員と内容・デザイ



図1-1 郷土料理実習（赤飯作りの様子）



図1-2 郷土料理実習
（煮しめとナゴヤとセリの味噌和え）



図1-3 郷土料理実習
（五島うどん入りカレーコロッケ）



図1-4 郷土料理実習
（鯨なます）



図1-5 郷土料理実習
（アオサの天ぷら）



図1-6 郷土料理実習
（かやくご飯）



図1-7 郷土料理実習
（じゃがいも団子のスープ）



図1-8 郷土料理実習
（五島うどんサラダ）



図1 - 9 郷土料理実習 (かまぼこ作りの様子)



図1 - 10 郷土料理実習 (かんころ餅作りの様子)



図1 - 11 郷土料理実習 (五島うどんチャンポン作りの様子)

ンについて協議した。協議して作成したパンフレットの一部を図2に示すが、問題点が地域住民に理解しやすいようにイラストを多く取り入れ、フォントを工夫し、やわらかで優しいデザインとなっている。

平成18、19年度は教員側が準備した研修内容の実施にとどまったが、平成20年度は上記パンフレット作成にも関与していたことから、グループ活動の時間を設定した。新上五島町の健康上の諸問題として、運動不足、料理の味付けが濃いこと

などが挙げられている。そこで、研修参加2、3年生が運動班、食生活班の2グループに分かれ、町内のウォーキングマップを作成するとともに新上五島町内の市販弁当・総菜類を調査した。

運動班は、町内浦桑地区、青方地区を中心に1500歩(約15分)、2000歩(約20分)、3000歩(約30分)のウォーキングコースを歩数、時間を複数回測定しながら作成した(図3)。歩数測定作業において、上五島町の町木である「つばき」、さらには珍しい「白つばき」など、ゆっくり歩くことによ

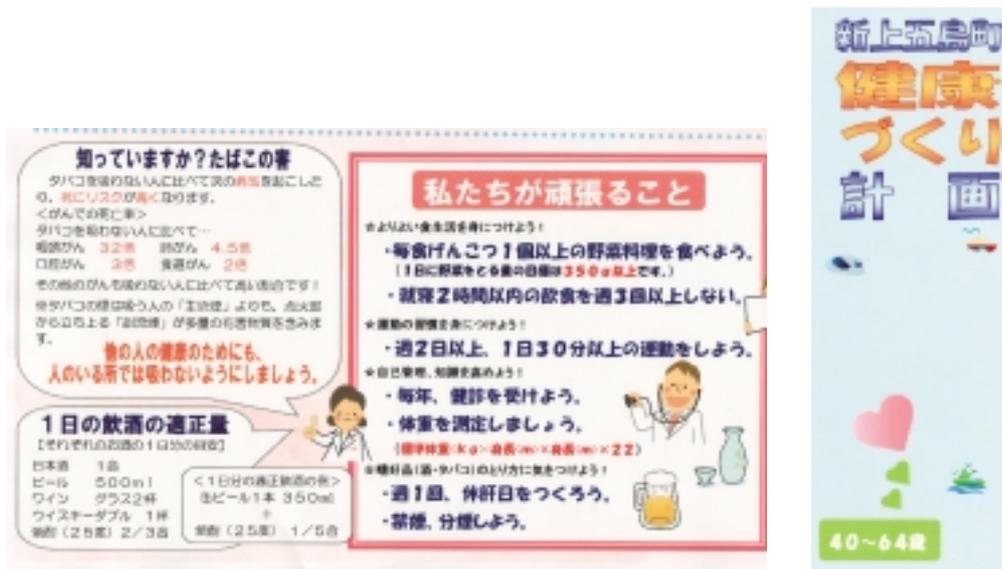


図2 新上五島町役場職員と協議して作成したパンフレットの一部



図3 学生が作成した新上五島町ウォーキングコースの一例

り普段気づかないような自然の風景に出会えたようである。また、作業中に地域住民が気軽に声をかけてくれたことも印象深く残っているようで、町中を歩くことにより、地域住民と若干ながら交流ができ、若者のこのような取り組みは地域活性化にもつながる可能性があると感じたようである。食生活班はスーパーや弁当屋において10種の弁当および複数の総菜を購入し、使用されている食材の重量を1品ずつ測定し、栄養価計算を行うとともに試食し、味付け等についてまとめる作業を行った。さらに最終的には調査した弁当を厚生労働省・農林水産省策定の「食事バランスガイド」のコマで栄養バランスの表示を試みた(図4)。しかしながら、市販弁当を調査した結果、上五島特有の味付けなどの特徴はあまり見いだせなかったようである。地域特有の総菜、弁当が少なく、チェーンスーパーなどで調製されていたり、大量調理用の冷凍食品などを用いて調製された画一化された弁当類が多くなってきたためであろうと学生は考察していた。

3. 学生の「しま」に対するイメージの変化

本研修前に事前指導を行い、その際、アンケートにより長崎県の離島地域への訪問の有無、研修参加の理由、「しま」のイメージ、研修内容中の興味・関心について尋ねた。

長崎県の離島地域に行ったことがない学生は、平成18年度は6名(86%)、平成19年度は7名(64%)、平成20年度は10名(43%)であった。平成20年度は大学院生や前年度「しま塾」に参加した学生が複数名存在していたことから、離島地域へ行ったことがある学生の割合は5割を超えて

いたが、長崎県内の出身者を含め離島地域への訪問回数は少ない。研修参加の動機は五島に行ってみたい、学外研修をしたい、文化や郷土料理を学びたい、管理栄養士の仕事を視察し、将来の進路選択に役立てたいと約2~5割の学生が回答した。

学生の「しま」に対するイメージを調査した結果を表2に示す。いずれの研修年度も5割以上の学生が海・山などの自然が多い、海がきれいという回答していた。また、5割程度の学生は医療・福祉・教育が不十分であるとのイメージを抱いていた。その他、人が優しい、地域のつながりが深い、少子高齢化が進んでいるようなイメージを抱いている学生が比較的多かった。参加学年のバラツキによる影響があるかもしれないが、平成18年度に比較し、平成19年、20年度は学生から出される意見が少なかった。研修プログラムの中では管理栄養士の仕事内容、病院、福祉施設、地域探索、郷土料理実習に興味・関心を持っている学生が多かった。

研修後に事後アンケートを行い、イメージの変化、満足度、問題点・改善点などについて、自由記述により回答を求めた。

イメージの変化として、店が意外に多い、学校数も多く、規模も意外に大きい、町の中心の病院は大きく、充実していた、老人福祉施設が多い、商業施設が多い、道路が整備されている、物価はそれほど高くないと、回答した学生が存在する一方で、病院数、老人福祉施設が不足している、中心部以外には店がない、交通の便が悪い、物価が高い、食べるものの種類が少ない、平均寿命が全国平均よりも低い、こんなに田舎とは思っていなかった、イメージしていたよりも平地が少なかった、と回答する学生も存在した。

「しま」の地域特性や医療等の現状、問題点、



図4 調査した弁当とバランス表示の一例

表2 学生の「しま」に対するイメージ

「しま」に対するイメージ	18年度		19年度		20年度	
	人数	%	人数	%	人数	%
自然が多い、海がきれい	6	86	7	64	14	58
医療・福祉が不十分	3	43	6	55	12	50
人が優しい、地域のつながりが深い	2	28	4	36	9	38
少子高齢化が進んでいる	4	37	2	18	8	33
人口が少ない	3	43	0	0	0	0
地産地消	2	28	1	9	0	0
第一産業が主産業	4	37	0	0	2	8
店があまりない	2	28	0	0	6	25
交通手段が車	1	14	0	0	3	13
車が少ない	1	14	0	0	0	0
福祉施設が多い	0	0	2	18	0	0
地域特有の(食)文化がある	0	0	0	0	6	25

表3 学生の「しま」に対する理解度^{a)}

質問項目	18年度 (n = 7)			19年度 (n = 9)			20年度 (n = 21)		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
地理、歴史、人、産業、経済などの地域特性	5	2	0	7	2	0	9	11	1
	71	29	0	78	22	0	43	52	5
医療、保健、栄養、福祉などの状況や問題点	6	1	0	7	2	0	13	8	0
	86	14	0	78	22	0	62	38	0
医療等関連機関(含ボランティア)の活動内容	4	3	0	4	5	0	3	16	2
	57	43	0	44	56	0	14	76	10
医療等関連機関(含ボランティア)の連携	2	5	0	5	3	1	6	11	4
	29	71	0	56	33	11	29	52	19
「しま」において調査等を行うときに必要なこと	2	2	3	0	5	4	6	11	4
	29	29	42	0	56	44	29	52	19

^{a)} 学生の理解度に関しては各質問項目について、A；わかった、B；ふつう、C；わからない、のいずれかで回答してもらい、上段にその回答人数、下段に%を示す。

活動内容等の理解度について、わかった、ふつう、わからない、の3段階で自己評価してもらった結果を表3に示す。「しま」の理解において、最も高い自己評価を示した項目はいずれの年度においても医療、保健、栄養、福祉の状況や問題点、地理、歴史、人、産業、経済などの地域特性であった。研修プログラムに沿った理解度と思われるが、上記「しま」のイメージの変化の回答差を考慮すると、十分な理解が得られたのか疑問が残った。

研修は学生の興味・関心に沿った内容で肯定的な意見、感想が多く述べられ、参加学生の満足度は高いと考えられた。一方で、教育現場(保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校)を見学したい、若者(地域住民)と交流を持ちたい、「しま」の食事情(各家庭の料理)を知りたい、地区ごと(中心部、周辺部)の生活の違いを知りたい、特

産物の収穫をしたい、栄養士の実際の勤務状況を見たい、異なる季節に訪れたい、などの意見が出された。スケジュール、地域住民との交流、調査場所、事前準備などに関して、問題点・課題が挙げられた。学生は、多数の地域住民との交流を通して、「しま」の生活をもっと深く知りたい、「しま」の生活改善のためにできることを提案し、実現したいと考えている気持ちが強いことが、事後調査により推察された。最終的な「しま塾」のまとめとして、各学年にレポートを提出させたが、研修内容を細かく振り返っており、学生にとって印象深い経験であったといえる。

4. 「しま塾」 - まとめと今後の課題

2008年の中央教育審議会答申¹⁾において、大学

全入の時代を迎え、学士課程教育の構築に向けて、学習意欲や目的意識の希薄な学生に対し、その改善策として学生参加型授業、協調・協同学習、課題解決・探究学習などの体験活動を積極的に取り入れることが大学に期待されている。3年目を迎えた栄養健康学科の「しま塾」の取り組みは、答申以前から実施を試みてきた体験活動であり、今後の学士課程教育の改革の基本方向に沿った先発的取り組みといえる。本学科卒業後、その多くが人と接する職業に従事することを鑑みれば、専門知識とともに企画・実行力、社会性・協調性、人間性・倫理性など幅広い視野を持つことを学士力として保証していくことが、本学科の学士課程教育の方向性といえる。

学生のフィールド体験実習あるいは学生と地域住民との連携教育などの教育プログラムは、学生支援 GP、現代 GP の課題として採択されている。フィールド体験実習を実施することは学生間の交流を促進し、学生間ピアサポートの下地作りとして効果が高いが、学生の積極性が今ひとつ感じられない場面があり、自発的な行動を促すような仕組みづくりの必要性が課題として挙げられている²⁾。また、地域連携教育においては、コミュニケーション力、情報収集力、企画・提案力、チームワークやリーダーシップなどの人間力の修得に効果があり、企業や行政と有機的に結びつき、開発や実現化へ向かうことができれば、学生にとってより実践的な教育環境となり得ると述べられている³⁾。

「しま塾」に対する学生の事前・事後アンケート調査の結果から、低学年時から管理栄養士として働く意欲を高め、「しま」の文化、自然に対しては、学生の興味・関心を満足させる研修プログラムとなっている。また、短期滞在であったが、研修後の学生同士の絆が強まり、人間関係を深める場となった。更に、平成20年度は学生のアイデアを盛り込んだ生活習慣病予防対策パンフレットの作成、グループ活動として町内ウォーキングマップの作成、市販弁当・総菜類の味付け・栄養

成分分析などを行った。体験・滞在研修により学生同士のコミュニケーション能力が高まることに加え、平成20年度の新たな取り組みは、企画・提案力、チームワークの面においても効果があったといえ、前報告³⁾と一致する。しかしながら、グループ活動を新たに組み入れたとはいえ、これまでの研修においては、学生が希望するような地域住民との交流の機会があまり得られず、事前学習、準備不足により、「しま」の理解が十分とはいえない状況で閉講している。また、生活習慣病予防パンフレット、町内ウォーキングマップともに作成した状態でとどまっており、地域住民に配布され、実際の健康づくりに活用されるまでに至っていない。したがって、学生の満足度は高いが、達成感は今一步であったといえる。

以上のことから、教員側が研修プログラムを提案するスタイルから、継続参加学生を軸とし、学生自身に研修目的を設定させ、それを明らかにするための方法を事前に検討した上で学生自身の活動時間を徐々に増やしていく必要がある。そして、課題解決型の研修に移行していく、地域住民と「しま」の健康についてともに考え、健康状態が改善されたことを実感として得ることにつながり、より実践的で達成感が得られるような研修にしてい、ことなどが新上五島研修「しま塾」における今後の課題である。

本研修は、平成18 - 20年度長崎県公立大学法人プロジェクト研究推進経費の援助を受けて実施したものである。

引用文献

- 1) 中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて（答申），pp.15-25（2008）
- 2) 大地純平，中村寛志，加藤正人：学生支援 GP における2008年度フィールド体験実習に関する報告，信州大学農学部 AFC 報告，第7号，87-91（2009）
- 3) 宮下智裕：現代 GP における地域連携教育プログラムの実践，KIT Progress：工学教育研究，15，119-128（2008）